

# マルクス『経済学批判要綱』における「流通費用」について

嶋 田 力 夫

## はじめに

マルクスが「資本の流通過程」を「資本一般」のうちにはじめて体系的に位置付けた『経済学批判要綱』において、それが基本的にいかなる理論領域をもつべきものとされていたかについては、すでにわれわれは「プラン」の検討を通じて明らかにしてきた(1)。

すなわち、マルクスはまず流通過程を生産過程に対する補足的媒介過程としてとらえ、資本の生産物としての  $W'$  の  $G'$  への実現過程に局限してとらえる視点にもとづいて、生産過程での価値増殖過程に対する「価値喪失過程」として把握したうえで、資本の価値増殖にとって流通時間=0にすることを資本のもつ本性であるとする視点から「流通費用」の問題を解明していたのであった。

他面マルクスは前者とは異なる視点、すなわち生産過程を包摂した資本の措定する流通としての「資本の流通」を展開する論理にもとづき、流通と生産との統一過程たる「総過程」的流通過程を前提とし、生産過程におけるものとは異なる資本区分、すなわち「固定資本」・「流動資本」という資本区分を行ないつつ「資本の回転」の問題を論じていた。しかもこの性格の異なる流通過程論の内容が単に併存していたというのではなく、むしろ前者の過程は後者の「総過程」としての資本の総体的運動過程の一過程をなすものとして資本の措定する流通を説くうえでの理論的前提をなしていたのであった。

ところで、『要綱』における「資本の流通過程」のこうした内容構成からみて、その理論上の特質を摘出するとすれば、それは形態的視点をともなった流通過程論とも言える「資本循環論」が欠如しているという点であろう。とすれば、『要綱』段階では、流通形態としての資本が生産過程をその形式のうちに包摂することによって生ずる形態的特質を多相的に明かにするところの「資本の流通過程」の本来的課題の設定も、したがってまた

その解明への道も、方法的に当初から閉ざされていたものといつてよいであろう。それと同時に、こうした理論的枠組のうちに展開された個々の概念も当然にその理論上の制約を体現したのとして展開されざるをえないものとしてあるということが予想される。

そこで本小稿では、こうした『要綱』における「資本の流通過程」の理論的枠組のうち、まずもって明らかにされた「流通費用」論はいかなる理論内容を有しているものであるかを、主としてマルクスの叙述をフォローすることを中心にして明らかにし、その意義と限界を究明しておこう。この意味からして本小稿は前二稿のいわば補論にあたるものである。

- (1) この点については、拙稿：マルクス『経済学批判要綱』における「プラン」と「資本の流通過程」(1)、(2)（『長野大学紀要』6号、8号）を参照されたい。

## 1

マルクスは、1857年12月中旬頃から1858年1月22日のあいだに書いたノートIVの15ページで、周知の次のような「資本の生産過程」から「資本の流通過程」への移行規定を与えていた。

「さて、すでにわれわれは、どのようにして価値増殖過程を通じて資本が1) その価値を交換自体（すなわち生きた労働との交換）によって維持し、2) 増加し、剰余価値をつくりだしてきたかを見てきた。いまや生産過程と価値増殖過程の統一の結果として過程の生産物すなわち資本自体が現われるのであるが、生産物としては資本は、資本がその前提であったところの過程から出てきているのであり、——また価値である生産物として出てきている。言いかえるなら価値それ自体がこの過程の生産物として、しかもより大きな価値として現われる。……さし

あたり措定され、現存しているものは、一定の（観念的な）価値の商品である。だからわれわれはいまや、資本が資本として措定される過程の第三の側面にくることになる。」（K. Marx, Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie, 1857—1858, Dietz Verlag, 1953, S. 305—306. 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』大月書店, II. 329—330頁。以下本書の引用ページについては, Gr. S. 305-306, 訳, II. 329-330頁と略記する。）

ここでマルクスが言うところの「資本が資本として措定される過程の第三の側面」とは、言うまでもなく、「単純な流通」としての第一の側面と「価値増殖過程」としての第二の側面に対して、「生産過程と価値増殖過程の統一の結果としての過程の生産物」たるW'のG'への実現過程を意味するものにほかならない。ということは、マルクスは「資本の流過程」を考察するに際して、それを当初から資本の運動としての $G-W \left\{ \begin{matrix} A \\ P m \end{matrix} \right. \dots P \dots W' - G'$ のうちの「本来的流過程」たるW'—G'の過程に局限した、いわば実現流通論的見地に立って解明しようとしていたものといつてよいであろう(2)。

- (2) この実現流通論的な見地は単に『要綱』にのみ見られた見解ではなく、のちの著作である『剰余価値学説史』、『直接的生産過程の諸結果』、『資本論』第1巻初版に至るまで継承されたものである。ところが、『資本論』第2版ではこの点が削除されていることは周知のとおりである。こうしたマルクスの「資本の流過程」の研究経緯をトレースしつつその理論的意義と限界を明らかにすることがわれわれの課題なのであるが、この点についてはすでに拙稿：マルクス『経済学批判要綱』における「プラン」と「資本の流過程」(1)の注(8)（『長野大学紀要』第6号, 42—3ページ）でふれておいたので参照されたい。

ところで、マルクスがこうした方法的視点から「資本の流過程」をとらえる限り、その展開内容は、当然、資本の生産物たるW'が流過程を経過するなかでいかなる変容をきたすことになるかということにならざるをえなかった。この点についてマルクスは次のように言う。

「……そこで厳密に考察すれば、資本の価値増殖過程—そして貨幣は価値増殖過程を通じてはじめて資本となる—は、同時にその価値喪失過程（Entwertungsprozess）、その貨幣資格喪失（demonetisation）としても現れる。しかも二つの面から、第一に、資本が、絶対的労働時間を増加することなく、生産力の増大を通じて相対的必要労働時間を減少させるかぎりでは、資本はそれ自身の生産費用—資本が一定額の商品として前提されていたかぎり—を切下げ、その交換価値を切下げる。—すなわち現存する資本の一部は、それを再生産することのできる生産費用の減少を通じてたえず価値喪失していくが、これは、資本に対象化されている労働の減少を通じてではなくて、この一定の生産物のうちに自己を対象化するのに現に必要なきた労働の減少を通じてである。現存する資本のこの不断の価値喪失は、ここで問題ではない。……ここでとりあげる価値喪失とは、資本が貨幣の形態から商品の形態に移行していること、実現されるべき一定の価格をもつ生産物の形態に移行していることにかんする価値喪失である。価値としての資本は、貨幣として存在していた。いまや資本は、生産物として存在し、そして観念的にだけ価格として存在するが、しかし、価値そのものとしては存在しない。資本が自己を増殖し、すなわち価値として自己を維持し倍加していくためには、まず貨幣の形態から使用価値（原料—用具—労賃）の形態に移行しなければならないであろう。しかしそれによって資本は価値としての形態を失うことであろう。そして新たに一般的富のこの形態を生み出すために、いまやあらためて流通にふみいらねばならない。」（Gr. S. 306, 訳, II. 330-331頁）。

みられるように、マルクスはまず「資本の価値増殖過程」は「同時にその価値喪失過程」「その貨幣資格喪失」過程としてとらえ、しかもそれは「二つの面」で顕現するものとしてとらえる。そのまず第一は、「生産過程を通じての資本の価値喪失」（Gr. S. 251, 訳, II. 382）、すなわち「生産力の増大を通じて相対的必要労働時間を減

少させる」という面として、いいかえれば、「生産費用の減少」を通じて行なわれる「価値喪失」という側面として顕現するが、しかしこの側面は「資本の流過程」を考察対象とする「ここでの問題ではない」とする。「ここでの問題」は「資本が貨幣の形態から商品の形態に移行していること、実現されるべき一定の価格をもつ生産物の形態に移行していることにかんする価値喪失」であるとするのである。ということは、マルクスは価値増殖過程たる生産過程に対して、流過程を  $W' - G'$  の実現過程としてとらえ、しかもその過程が「価値喪失」過程であるとしてとらえていたことを意味するものにほかならない。

それでは、こうした「価値喪失」過程としての理論的枠組のうちにとらえられた「資本の流過程」は具体的にいかなる内容のもとに展開されているであろうか。さらにこの点を明らかにしよう。

## 2

マルクスはまず資本流通の「二つの契機」として「生産過程と流通そのもの」(Gr. S. 416, 訳. Ⅲ. 453頁)とがあるとし、そして前者の契機においては「資本が生産過程の部面内にどのくらい滞留するかは、生産過程の技術学的諸条件にかかっており、この局面内での滞留は——その継続期間は、生産の種類、生産の対象等に応じて異なっているにちがいないとはいえ——生産力の発展と直接に一致する」(Gr. S. 417, 訳. Ⅲ. 453頁)としながら、しかし「生産過程の局面における資本の滞留期間はそれ自体流通の一契機となる」が、「ここではわれわれはまだ多数の資本にかかわりあわない」ので「この契機はここでの問題に属さない」(Gr. S. 417, 訳. Ⅲ. 454頁)として、方法的に「資本一般」の問題から捨象した上で「流通そのもの」たる「第二の契機」について次のように述べる。

「第二の契機は、資本が生産物に転化したときから、それが貨幣に転化するときまでに経過する時間である。あたえられた時間に、資本が生産過程、自己増殖 (Selbstverwertung) を新しく何回開始できるかは、明らかにこの時間の経過する速度か、またはその継続期間にかか

っている。」(Gr. S. 417, 訳. Ⅲ. 454頁)と。

みられるように、マルクスは資本の流通の「第二の契機」としての「流通そのもの」を資本の直接的生産過程の結果としての生産物  $W'$  が貨幣  $G'$  へ「転化するときまでに経過する時間」であるとしてとらえ、しかもこの「時間」の「速度」の遅速ないし「継続期間」の長短が資本の「生産過程、自己増殖」にとって重要なモメントとしてあることに着目している。

そこでマルクスは「ここでわれわれにとって関心の深い問題は次の問題である」として、この「問題」を「労働から独立し、直接に労働から出発しないで、流通それ自体に起因する価値規定の一契機がここにはあってこないだろうか?」(Gr. S. 418, 訳. Ⅲ. 455頁)として受止めることになる。つまりマルクスにとって「資本の流過程」の問題は「流通それ自体に起因する価値規定の一契機」がいかに入り込んでくるかという問題として、すなわち、「流通の価値規定に及ぼす影響」の問題として考察されるべきものと考えられたのであった。しかもこの「問題」は具体的には「ここで一つの契機、すなわち流通費用がつけくわわるが、これは単純な流通概念のうちによこたわっているものではない」(Gr. S. 422, 訳. Ⅲ. 459頁)として、「単純な流通」のうちにはなく「資本の流通」のうちに「流通費用」こそが説かれるべき「問題」であるとしたのである。

ところが、「流通費用」が説かれるべき土壌をなした「資本の流通」は、マルクスにあっては次のような「四つの契機」のうち「契機Ⅱ」)に限定したのである。すなわち、

「資本の全流通を考察するならば、四つの契機が現れる。……Ⅰ) 現実的生産過程およびその継続期間。……Ⅱ) 生産物の貨幣への転化。この手続きの継続期間。…Ⅲ) 過当な比率での貨幣の原料、労働手段、労働への転化、つまり生産的諸要素としての資本の諸要素への転化。……Ⅳ) 資本の一部分と生きた労働力能との交換は特殊な一契機として考察することができるし、またそのように考察しなければならない。というのは労働市場は、生産物市場とは別の諸法則によって規制されるからである。……

…契機Ⅰ)は、すでに述べたようにここでは考察されない。なぜならばそれは価値増殖一般の諸条件と一致するからである。契機Ⅲ)は、資本一般ではなくて、多数の資本を論ずるときになってから考察することができる。契機Ⅳ)は、労賃等にかんする篇に属する。

ここでは契機Ⅱ)だけを問題にしよう。」(Gr. S. 419—420, 訳, Ⅱ. 456—457頁)と。

ということは、マルクスは一面で「資本の全流通」を「四つの契機」としてとらえながら、言いかえれば、「価値が貨幣、生産(価値増殖)過程、生産物、貨幣と剰余資本への再転化というさまざまな形態で現れる」ところの「価値の転化過程」、「価値の質的過程」(Gr. S. 423, 訳, Ⅲ. 460頁)としてとらえながら、他面では「流通費用」を問題とする限りで対象としたのは、こうした「価値の転化過程」に対応した「費用」としてではなく、「契機Ⅱ)」つまり $W' - G'$ に対応する「費用」として設定していたことを意味するものにほかならない。このことは、先きにも見たように、マルクスが「資本の流過程」を考察する際に提示した実現流通論的な「移行規定」を再度方法的に限定したものといつてよいであろう(3)。

- (3) 「資本の全流通」の考察のうちに「資本の流通」が考察されることなく、その一契機たる $W' - G'$ の過程に局限した形で「資本の流通」の問題がまず設定され、しかもそれが「流通費用」として説かれるべきものとしたことこそ、「資本循環論」の欠如をもたらした根本原因をなしたものと言える。というのは「資本の全流通」をまずもって設定し、明かにしておかなければ、生産と流通の相互制約関係を多相的に明かにするという「資本の流過程」にとっての本来の課題を究明しえないからであり、この側面からみて、後に詳述するように「要綱」では当初からその論理的展開にとって必要な基本的な前提が喪失していたものと言えるであろう。

それでは、こうした「契機Ⅱ)」の過程に対応して説かれるべきものとした「流通費用」とはいかなるものであろうか。

マルクスは「流通費用」を展開するに際して、「流通は、空間と時間とにおいて進行する」(Gr. S. 432, 訳, Ⅲ. 470頁)としつつ、流通の「空間的条件」と「時間的契機」とを区分し、これに対応した「費用」の問題として明らかにすることからはじめている。

まず「空間的条件」としてマルクスは次のように規定する。

「空間的条件、生産物の市場への搬入は経済学的に考察すると、生産過程そのものに属している。生産物は、それが市場へ出てはじめて現実的に完成する。生産物が市場へすすむ運動は、やはり<<その他の費用と>>ともに資本の生産費用に属する。……だがまたある側面からすれば、この契機はまた、流通の経済的過程にたいする外的実存条件として、流通の生産費用にかぞえることができるのであって、そこで流通はこの契機からすれば、それ自体たんに生産過程一般の契機として現れるばかりでなく、直接的生産過程の契機としても現れる。いずれにしてもここで現れるのは、生産力の発展と資本のうえにうちたてられた生産一般の発展との一般的程度による、この契機の規定である。より正確に言えば、この場所的契機は——生産地自体が市場であるばあいを除くと、生産物の流通にとっては一つの不可欠な条件である生産物の市場への搬入は——、生産物の商品への転化として考察されうるのであろう。生産物は、市場においてはじめて商品である。」(Gr. S. 432-433, 訳, Ⅲ. 470-471頁)と。

みられるように、マルクスは「空間的条件」として「生産物の市場への搬入」、「生産物が市場へすすむ運動」、「場所的契機」をあげているが、これはとりもなおさず「輸送過程」、「運輸過程」を意味するものにほかならず、したがってマルクスが「市場への搬入(流通の空間的条件)は生産過程に属する」ものと考える限り、そこに要する「費用」は「流通の生産費用」または「資本の生産費用」としてみなざるをえないものとしてあるわけである。そしてマルクスはさらに「ともあれ、交通手段に特別の一篇をささげる必要が

ある」(Gr. S. Ⅲ. 459頁)として、「共同体」と資本主義とにとって有するその経済的意義を「道路」に関する詳細な考察を通して論じたのちに次のように言う。

「われわれが主題をはなれた結果は、ともかくこうである。交通手段の生産、流通の物質的条件の生産は、……なんら特殊な事態を構成しないということである。ただ、この点についてはまだ厳密に特徴づけるまでにたちいていないが、特殊な資本とその特殊な生産過程との諸条件にたいするものは区別された、社会的生産の共同社会的・一般的諸条件にたいする資本の特有な (spezifisch) 関係についての展望は、……開かれたのであった。」(Gr. S. 432, 訳 Ⅲ. 470頁)と。

このようにマルクスは「流通費用」をまづもって「空間的条件」たる「運輸費用」の考察からはじめ、しかもこの考察を通して「流通費用」の「特殊的」なものとの「一般的」なものとの区別を行なったのであった(4)。

- (4) 「流通費用」をまづもって「運輸費用」から説くということは後の著作である『資本論』のそれと対比すればかなり特徴的なことといえよう。すなわち、『資本論』では周知のように次のような構成になっている。

## 第六章 流通費

### 第一節 純粹な流通費

- 一、売買期間
- 二、簿記
- 三、貨幣

### 第二節 保管費

- 一、在庫形成一般
- 二、本来の商品在庫

### 第三節 運輸費

みられるように、『要綱』の「流通費用」の考察が『資本論』のそれとはまったく逆になっていることがわかるであろう。このことは、単に展開上の序列の問題として看過することはできず、後に詳述するように『要綱』段階の「流通費用」概念自体の不明瞭さにつながってくる要因となっている。

なお、商品の貨幣への「転化過程」、つまり

形態変換にともなう「運輸」の意義を展開している箇所を摘記しておけば次のようである。

「運輸が商業と関連するかぎりでは、純粹の流通費用にもちこむべきものとしてもっとも普通のものである。商業が生産物を市場に送りどけるかぎりでは、それは生産物に新たな形態をあたえる。なるほど商業は場所的定在を変更するだけである。しかし形態変更の仕方はわれわれにはどうでもよいことである。商業は生産物に新たな使用価値をあたえ(そしてこのことは、目方をかけたり、長さを測ったり、包装したりして、生産物に消費するにふさわしい形態をあたえる小商人にいたるまであてはまる)、そしてこの新たな使用価値は労働時間を要費し、したがって同時に交換価値である。市場への搬送は生産過程それ自体に属することである。生産物は、市場に到着して、はじめて商品であり、はじめて流通にはいることになる。」(Gr. S. 528-529, 訳 Ⅲ. 582頁。)[運輸手段の施設 (Erleichterung der Transportmittel) は、それが物理的な商品流通の施設を意味しているかぎり、たんに資本の流通の形態諸規定だけが考察されているこの場所には属さない。生産物は、それが市場に到達してはじめて商品となり、はじめて生産局面からあゆみでる。他方では、資本の復帰 (Returns) ——すなわち流通時間——が、生産の場所からの市場の距離とともに増大しなければならないかぎりでは、運輸手段はここでの問題である。したがって運輸手段による距離の短縮は直接に、こうした側面からみて直接に、資本の流通の考察に属するものとして現れる。じっさいのところそれは、それ自体にかんする篇に属する市場論に本来属することである。」(Gr. S. 564, 訳 Ⅲ. 622-623頁)。

他方、こうした「空間的条件」に対し、「時間的契機」については次のように規定する。

「第二に、時間的契機。これは本質的に流通の概念に属する。商品から貨幣への移行の行為が契約のうえで確定されたとして、この行為には時間がかかる——数えあげ、重さを秤り、寸法をとる。この契機の短縮は、同様に生産力の発展である。こうした時間はまた、ただ貨幣の状態から商品に移行するための外的条件としても把

握されている。この移行は前提されている。この前提された行為のあいだに経過する時間が問題である。これは流通費用に属する。もう一つの時間は、一般に商品が貨幣に移行するまでに経過する時間である。あるいは、商品が依然として商品にとどまっているあいだの、現実的価値ではなくて潜在的価値にすぎないあいだの時間である。この時間は、純粹の損失である。」(Gr. S. 433, 訳. Ⅲ. 471頁)と。

つまり、この「時間的契機」は「商品から貨幣に移行するまでに経過する時間」あるいは「商品が依然として商品にとどまっているあいだの時間」、すなわち売買過程における「時間」を意味するものであり、したがってこの「時間」は「本質的に流通の概念」に属し、したがってまたこれに要する「費用」は「空間的条件」たる「運輸費用」とは異なるところの「流通費用」に属し、「純粹の損失」をなすものとしてとらえられることになっている。言いかえれば、マルクスがここで「時間的契機」としていることは特殊社会的な費用たる売買費用としての「純粹な流通費用」を意味しているものにほかならない。

ところでマルクスはのちに再度、ノート VI の 20-24ページ (1858年2月頃執筆) で、こうした「時間的契機」としてとらえられたところの売買費用としての「流通費用」を「本来的流通費用」とし、この点を「流通費用」論の中心論題にすることになる。すなわち、

「本来的流通費用……は生産的労働時間に帰着させることのできないものである。だがまた本来的流通費用はその性質上、商品の貨幣への転化とこの貨幣の商品への再転化とに必然的に要する時間、つまり資本をある形態から他の形態に移しわたすのに要する時間だけにかぎられる。」(Gr. S. 518, 訳. Ⅲ. 570頁)と。

そしてマルクスは結論風に次のように述べる。「われわれがさしあたり確認したいと思うことは、次のこと、すなわち、さまざまな経済的契機そのものを通過することから生じる諸費用、流通費用そのものは、どんな労働がこれがむすびついているにしても、生産物の価値になにものもをも付加しない、なんら価値産出の費用ではないということである。流通費用はたんに創造

された価値からの控除である。」(Gr. S. 518, 訳. Ⅲ. 570頁)と。

こうしてマルクスは「流通費用」が「生産上の空費 (faux frais de production)」(Gr. S. 527, 訳. Ⅲ. 549頁)であることを明確にとらえ、『資本論』の「流通費用」論の原型になる考え方を示すことになるのである。

こうした『要綱』における「流通費用」概念の導出過程からみると、「資本の流過程」を「資本の流通」の「契機Ⅱ」としての価値実現過程に限定し、そしてこの流過程が価値増殖過程としての生産過程とは異なって「価値喪失」過程としてとらえていたがゆえに、一面で特殊社会的な費用たる売買費用を「空費」としてとらえ、それを「流通費用」概念の中核にすえることごとくまで到達できたものと言えよう。

しかしながら、マルクスはこのように一面で「流通費用」を特殊社会的な費用たる売買費用としてとらえながら他面で次のように言うにすぎない。

「上述したいっさいのことから生ずることは、流通は資本の本質的過程として現れるということである。生産過程は商品が貨幣に転化するまでは新しく開始されえない。過程のたえまのない連続性、すなわち価値のある形態から他の形態への、または過程のある局面から他の局面への、さまたげられることなくよどむことのない移行は、……資本のうえにうちたてられた生産にとっての基本条件として現れる。他方に、この連続性のこの必然性が指定されている一方、諸局面は、特殊な、相互に無関心な過程として時間的・空間的に分離する。そこで資本のうえにうちたてられた生産にとっては、生産の本質的条件、すなわち生産の総過程を構成する種々な過程の連続性がつくりだされるかどうかは、偶然なこととして現れる。」(Gr. S. 433-434, 訳. Ⅲ. 471-472)と。

つまり、「資本の本質的過程」としては「価値のある形態から他の形態への」移行、すなわち「過程のたえまのない連続性」として現われるが、しかしこの「生産の総過程を構成する種々な過程」は「特殊な、相互に無関心な過程として時間的、空間的に分離する」ので、この過程の「連続性」は「偶然的なこととして現われる」ことに

なるものとしてとらえるのである。

たしかに、マルクスがここで述べるように、「資本の本質的過程」としての「価値のある形態から他の形態への」移行の「連続性」は  $W' - G'$  という「命懸けの飛躍」を経過せざるをえないという面からみて「偶然的なこと」といわねばならないが、しかしむしろそうであるがゆえに、過程の「連続性」が「流通費用」との関連でいかに進行しうるものであるかが明らかにされねばならない。このことはとりもなおさず「流通の価値規定に及ぼす影響」の問題をこうした「流通費用」をえられていたかということである。次にこの点を媒介としていかにとらみておこう。

#### 4

マルクスはまず資本のこうした「連続性」すなわち「生産の再更新」、いいかえれば「ある一定時間にどれだけの生産物が生産されるか、資本はある一定時間に何回価値増殖をすることができるか、すなわち何回その価値を再生産し、また倍加することができるか」ということは「流通の速度、流通の経過する時間に依存する」(Gr. S. 436, 訳, III. 474頁)ものとしつつ、さらにこの点を次のように敷衍する。

「同一資本がある一定時間で生産過程(新価値の創造)を反復できる割合は、明らかに生産過程そのものによって直接に措定されていない一条件である。だから流通がもつばら労働のうちによこたわっている価値規定自体の契機をなんらつくりださないとすれば、生産過程が反復され、諸価値が創造される速度は、流通の速度に依存している」(Gr. S. 436, 訳, III. 475頁)と。

つまり、「生産過程の反復」、すなわち「諸価値の創造される速度」は「労働のうちによこたわっている価値規定自体の契機をなんらつくりださない」ところの「流通の速度」に依存しているものとするのである。

ところでこの場合の「流通の速度」はマルクスによると「生産過程と流通それ自身から生ずる諸制限ではなくて(恐慌、過剰生産等のばあいのように)、外的な制限だけがある局面から他の局面への移行を抑止するというを想定している」(Gr. S. 437, 訳, III. 475頁)ので、「生産物に実現さ

れた労働時間以外に、価値創造——生産的な労働時間そのもの——の契機として、資本の流通時間(Zirkulationszeit)がはいってくる。労働時間が価値を生む活動として現れるならば、資本のこの流通時間は価値減少の時間(Zeit der Entwertung)として現れる」(同前頁)ものとするのである。そして、さらにマルクスは「価値減少の時間」としての「流通時間」について次のように規定する。

「流通時間それ自身は、価値増殖の制限である。…… $\llcorner$ それは $\gg$ 剰余労働時間からの控除、または剰余労働時間にくらべての必要労働時間の増大 $\llcorner$ である $\gg$ 。生きた労働が価値創造的(wertschaffend)であるのにたいし、資本の流通は価値実現的(wertrealisierend)である。流通時間はこの価値実現の一制限にすぎず、そしてそのかぎりでは価値創造の制限である。」(Gr. S. 441, 訳, III. 479—480頁)と。

つまり、「資本の流通」を「価値実現的」な側面、すなわち  $W' - G'$  に局限し、そしてこの局面に要する「時間」、すなわち「流通時間」は「生きた労働が価値創造的」であるのに対して「価値減少の時間」であり、したがってそれは「価値創造の制限」をなすものとしてあるととらえるのである。

たしかにマルクスの言うように、 $W' - G'$  の「価値実現」過程における「流通時間」そのものは「価値創造的」なものではなく「価値減少」ないし「価値創造の制限」としてあるであろう。ただ問題はこうした「価値創造の制限」をなす「流通時間」がいかにして「価値創造」の「契機」をなすかを明らかにすることにある。それは言うまでもなく「流通速度」を高めること、すなわち「流通時間」を短縮することによってのみはたされうるものとしてあるが、この「流通時間」の短縮は理論的には「流通費用」概念の確立を媒介としてはじめて解明しうるものとしてある。ところがマルクスは「価値創造の制限」をなすこうした「流通時間」の短縮を「流通費用」との明確なる関連なしに次のように指摘するにすぎなかったのである。すなわち、

「資本によって支配される労働時間の全体が最大、たとえば無限大 $\infty$ として、必要労働時間は

この∞のうちの無限に小さい部分を、剰余労働時間は同じく無限に大きい部分をしめるとすれば、この後者は資本の価値増殖の最大限であるうし、そしてこれこそ資本がめざす傾向なのである。他方に、資本の流通時間=0だとして、資本の転形の種々な段階が、現実においても頭のなかで考えたのとまったく同じように急速に進行するとすれば、これは、同じく生産過程の反復されうる要因の最大限、したがって一定時間での資本の価値増殖過程の回数の最大限であるだろう。生産過程の反復は、この過程それ自身が原料を生産物に転化させるために継続し、経過する時間によって制限されるだけであろう。したがって流通時間は、なんら積極的な価値創造的要素ではない。流通時間が0にひとしいとすれば、価値創造は最高であるだろう。剰余労働時間または必要労働時間=0だとすれば、すなわち必要労働時間がすべての時間を吸収したとするか、あるいは生産がまったく労働なしにおこなわれうるとすれば、価値も資本も価値創造も存在しないであろう。だから流通時間が価値を規定するのは、それが労働時間の価値増殖にとって、自然的制限として現れるかぎりにおいてだけである。したがって流通時間は事実上剰余労働時間からの控除、すなわち必要労働時間の増大なのである。」(Gr. S. 437, 訳. III, 475-476頁)と。

みられるように、価値増殖する運動体としての資本にとって、「積極的に価値創造的要素でない」ところの $W'-G'$ の「実現過程」における「流通時間」は「無限に小さい部分」すなわち0に等しければ「価値増殖の最大限」になるものとしてのみとらえるにすぎない。つまり、「価値減少」の「時間」としての「流通時間」が少なければ少ないほど資本の「価値増殖」が最大になるものであるという指摘がなされているにすぎず、資本はその本性からしてどのような「契機」を通じて、いかに「価値減少」としての「流通時間」を0そのものに近づけうるかのさらなる分析はなされえないままである。

それではこの『要綱』段階のマルクスがこうした理論的分析をなしえない根本原因はどの点に見出しうるであろうか。それは、これまで見てきた

ように、 $W'-G'$ の実現流通論の見地からする「流通費用」概念それ自体の不明瞭さに由来しているものといえよう。

もともと「流通費用」なるものは、まず生産過程に投ぜられる生産資本と流通過程に投ぜられる流通資本との区別があって、そのうえでこの流通資本に対して「マイナスをミニマム化する」作用をもつ関係において明らかにせられる性格のものであり、したがってその「費用」の投下のもつ意義も流通期間の短縮、流通資本の節減、流通資本の生産資本化という点にあるのであって、マルクスがここで言う「価値減少」としての「流通時間」の短縮ときわめてかかわりのある概念なのである。にもかかわらず、マルクスがこの『要綱』において一面で「流通費用」を特殊社会的な費用たる売買費用として「空費」概念のうちにとらえながらも、こうした「流通費用」投下のもつ意義を何んら解明しえなかったということは、それはとりもなおさず「資本の流過程」を当初から価値増殖過程としての生産過程と対抗的に「価値喪失過程」としてとらえ、しかも「資本の流通」を本来流通形態としてある産業資本の総体的運動  $G-W \begin{cases} A \\ P_m \end{cases} \dots P \dots W'-G'$  のうちの $W'-G'$ という実現過程に局限し、その過程に要する「費用」をすべて「流通費用」としたため、流通資本と「流通費用」との混同ないし一体化がみられ、したがって両者の区別と関連を、すなわち「流通費用」投下のもつ意義を考察する前提そのものが当初から欠落していたものといえてよいであろう。このことは、他面からみれば、この『要綱』段階のマルクスにあっては本来流通形態としての資本が生産過程をその形式のうちに包摂することによって生ずる形態的特質を明らかにするという「資本の流過程」の基本的課題が明確にとらえられなかったということを意味するものであり、したがってまた産業資本の循環運動の全体をとおしてあらわれる生産と流通の相互制約的な関係を多相的に明らかにする端初を切り拓くところの「資本循環論」の考察が欠落することにもなったといえよう。

ところで、こうした流通資本と「流通費用」との混同ないし一体化という側面はのちの『資本論』の「流通費用」論にも一面で残ることにもな



るのであるが、それは今は問わないとして、『要綱』段階のマルクスはこうした理論的代償を払いつつ、むしろそうであるがゆえに、「流通の価値規定に及ぼす影響」の問題を、『要綱』の「資本の流通過程」の前半の論理とも言える「流通費用」論の積極的な媒介なしに「本来的流通過程」と「本来的生産過程」との統一たる「総過程」的流通過程に即して究明されるところの「資本の回転」の問題のうちにいわば吸収することによって

展開することになるのである。『要綱』における「資本の流通過程」のいわば後半の論理とも言えるこうした「資本の回転」の問題がいかなる内容を有し、そしてそれが「流通の価値規定に及ぼす影響」の問題をいかなる程度に解明していたかについてはさらに別稿を要さざるをえない。

(1979.8.5)